

会社を変える分析の力

講談社現代新書 講談社 235頁 2013年 定価798円(税込)

はじめに、本書は学術専門書ではなく、ビジネスマン・一般向けの新書であることをお断りしておく。本書は企業人や研究者、学生といった方を対象に、データ分析を活用する力を身に着けることを目的とした、実務者向けのデータ分析入門書である。データ分析入門書と言っても、統計的分析法やデータマイニングといった分析ツールの解説ではなく、ビジネスに役立てるためのデータ分析とは何か、ということについて、著者の経験で培われたデータ分析の「哲学」を体系的に記した構成となっている。

本書の章立ては以下のとおりである。

- 第1章 データ分析に関する勘違い
- 第2章 データ分析でビジネスを変える力
- 第3章 分析力を向上させるための流儀
- 第4章 分析プロフェッショナルへの道

第1章では、データ分析の目的について、データ分析を業務とする人が陥りやすい誤解の例を挙げながら、データ分析の主たる目標が何なのかをわかりやすく解説している。データ分析の目標は、データ分析を通じて問題を解決すること、というORに携わっているものなら聞き慣れた表現が冒頭に出てくるが、読み進めると、データ分析はあくまでも問題解決の手段にすぎないこと、データ分析を中心に考えないこと、分析に使うモデルは所詮モデルであること、といった警告が著者の経験談とともに語られ、さらにはビッグデータの本質と昨今のビッグデータ礼賛の風潮に対する警告にまで話が及んでいる。

第2章では、データ分析の分析力に焦点が当てられ、データベースで膨大なデータを分析できるようになったとか、分析ソフトウェアの使い方が向上した、といったデータ分析力だけではビジネスを変えられないという、著者の強い思いが述べられている。著者はここでデータ分析の結果、ビジネスを変えられることができたのか、という点の重要性を強調し、データ分析

を通じてビジネスを変えるための方法論と必要な能力について、わかりやすい例とともに解説を行っている。特に、分析結果を意思決定者・現場の人たちに使ってもらうところの重要性について、分析結果が意思決定者になかなか採用されないのは何故か、どうしたら分析結果を意思決定者に使ってもらえるようになるのか、というところの解説には納得させられるものがある。

第3章では、前章で紹介されたデータ分析に必要な能力をどのように発展させることができるのか、という点について、著者自身が実践していることや若手の育成のときに行っていることが紹介されている。本章で紹介されている良い分析者になるための分析者9カ条は、項目だけ見ると当たり前と思われることが並んでいるが、それぞれの項目の意義について、著者の経験談とともにわかりやすく解説されており、データ分析を主業としている方も改めて納得する点が多いのではないだろうか。

第4章では、ここまでの内容を総括し、分析によって報酬を得る分析スペシャリストが今後のビジネスシーンで多く求められていること、どのようにしたら分析力を極めてかつ分析結果で報酬を得ることができる分析プロフェッショナルになれるか、ということについて、著者の分析スペシャリスト観が述べられている。

全体を読んで、評者が痛感したのは、分析力を高めるのはツールの使い方には秀でるだけでなく、問題の現場にいる当事者や上司、経営陣といった意思決定者とのコミュニケーション能力の重要性である。ORの研究教育に携わる評者も「問題解決に役立つOR」という問題意識を持っているが、それは本書が指摘する問題解決の手段のところには留まっているだけで、それを使って問題解決に結び付けるためにはどうしたらよいか、というところまで深く考えたことはなかった。ビジネスにいかにかデータ分析を役立たせることができるのかという問いは、そのまま実際の問題にいかにかORを役立たせることができるのか、という問いに置き換

えることができる。その答えの一つが、数多くのデータ分析業務を経験し、単なるデータ分析屋ではなく、ビジネスにいかに関与できるのか、ということに常に意識して仕事を重ねられてきた著者が執筆された本書の中にあるように思われる。これからOR

ワーカ、さらには問題解決のプロフェッショナルを目指す人にとって、本書はデータ分析の位置づけや心構えについて貴重かつ多くの示唆に富んだ書籍であり、是非一読を薦めたい。

(笠原正治)